

## 原爆体験に根ざした平和教育

森下 弘



「広島原爆を体験していない若い世代の高校生たちは原爆についてどう感じていますか」これはもう今から十年ばかり前、東京の文学同人のグループの友人たちが広島へやってきて、私に投げかけた問いである。

原爆が広島、長崎に投下されて、27年経った今日、広島の高中生たちでさえ、原爆問題よりも、公害、交通災害といった文明災害の方がより身近な、より重要な問題だ、と考える者が多い。また、市内のある中学校の入学試験問題に出された「広島に原爆が投下された年月日はいつか」という問いに3割もの小学生たちがよう答えなかった。原爆はもう過去の問題でしかないのだろうか。

1945年8月6日、原爆が投下された時、私は14歳、旧制中学校の三年生だった。広島市内東南の鶴見橋地区、爆心より1.7キロメートルの地点で建物疎開の作業中被爆し、顔、手に熱線による火傷を受け、ケロイドになった。同時に家は焼かれ、母を失い、多くの学友を、師を失った。その悲しみ、ケロイドを恥じる気持、敗戦による戦後の生活苦、「天皇陛下のために」と信じ込まされてきた精神的な支柱を失った虚脱感、そんな中で「わーっ」と叫びだしたいような絶望感、「原爆さえなければよかったのに」という怨念、それらに押しひしがれ、長い間、自閉的な気持ちに陥っていった。

「生き残った者が何かをしなければならぬ。あの巨大な赤々と燃える溶鉱炉に投げ込まれたような被爆の瞬間から突如変わった運命を、皮膚のずるっとむけてさまよい歩く人々、膨れ上がった屍体の山を、真っ黒焦げの幼児のことを、放射能のため、血を、黒い泡を吐いて死んでいった身寄りや学友のことを、何としても訴えなければならぬ」という気持ちはずっと内にありながら、結核にたおれ、再び朝鮮に戦乱がおこり、水爆が開発され、私たちは自分の不安と頹廃とたたかうのに手いっぱいだった。病床にあって体験記をつづり、歌に詠み、被爆者への援護を新聞に投書しながら、かろうじて回復し、学校を卒業し、教壇に立つことにもなった。しかし、ケロイドの醜さを見つめる生徒の目、気持を意識して暗い気持になることしばしばだった。そんなとき「体験をもたない生徒たちは原爆のことをどう考えていますか」と問われて、私はとまどってしまった。

被爆後十数年、そこには原爆を、戦争を体験したことのない若い世代が成長し、登場してきている。事実、今さら驚かされるとともに、広島にいながら、日々生徒に接していながら、原爆のことを客

観的に話し合ったことがない、よう話しえなかった自分を恥じた。いや、原爆のこと、自分の醜さを思い出さなければ、それに目を閉じてさえいれば日々の心は平穏だった。無意識に原爆に触れることを避けていたのかも知れない。

質問に触発され、思い立って「高校生の原爆被爆等に関する意識と知識の調査」をはじめた。その結果は「自分は原爆を体験していないので実感にならない」「日々のことに追われて平和を実現するために何をしたいか解らない」「被爆者は気の毒と思うが、自分は何もしてあげられない」という意見の多いのにまたしても驚かされた。

あの悲惨は忘れ去られていいのだろうか。若い人たちに体験を継承し、再びあのような過ちが繰り返されないように、平和への意志を培ってゆかなくていいのだろうか。いまの核の時代にあって、もし核戦争になれば、体験のない若い人たちだからといって生き残れる保障もなければ、戦争を防ぐための責任逃れもできるわけではない。

放射能による障害は、現在なお被爆者の身体を蝕んでいるばかりか動物実験では明らかなような被爆者の子弟への影響が、人間の場合には存在しないという医学的証明は今のところなされていらない。そこからくる不安、あるいは就職、結婚にあたって、もたらされるかも知れない疎外、それはもはや若い世代自身の問題、お互いの理解と連帯の問題でこそある。

八月六日の広島を、動員された学徒、子供たちの死、苦しみを軸に再現した劇映画「ヒロシマ」を生徒たちに見せ、原爆資料館から写真やパネルを借りて展示し、原爆体験記や詩集を購入して読ませ、クラブで話し合いをさせ、被爆者からなる平和巡礼団に応募し、各国の若い世代にも体験を訴える、などいろいろと自分の出来る限りのことを試みた。しかし、継年的に行う意識調査の結果を見ても事態は好転してはいない。なぜだろう。体験がないというだけではない。もちろん年月が経つにつれ記憶が薄れていくことは確かだ。しかし、教科書を調べてまた驚いたことには、日本の教科書においてさえ。広島原爆の記述は、わずかに「1945年8月6日、広島、長崎に原爆が投下され、ポツダム宣言を受諾して戦争が終結した」という以上には出ていないことだった。それも逐年、原爆や戦争の悲惨、その原因についての考察の記録は減少し、抽象化されており、その背景を考察していくと、教育に対するさまざまな規制が加わっていることも解ってきた。もはや一個の被爆者、有志の先生方の努力だけではどうにもならないことを感じた。学校ぐるみ、地域ぐるみの原爆教育、平和教育の必要を思い、かつ訴えた。そうした中で1968年、9年以来、被爆教師の会が生まれ、自主的な原爆、平和教育の教材作り、教育実践、カリキュラム化、研究が始まった。1970年には全国被爆教師の会が結成された。しかし、まだそれらは地に着いたばかりであり、障害も多い。戦争が、核廃棄の問題が、国際的な問題であるからには、平和教育はさらに、国際的な規模で推し進められてゆかねばならない。